◆ 受講生セミナー報告

ブラジル奄美移民
受け継がれる島っちゅアイデンティティー

加　藤　里　織

はじめに

ブラジルへの日本人の集団移住は、1908年からはじまり、これまで多くの人々が海を渡り、新天地ブラジルを目指した。鹿児島と沖縄の間に位置する奄美大島からも、ブラジルを目指した人々がいた。鹿児島を母県とする奄美移民は、従来の日系ブラジル移民研究史のなかで鹿児島という括りでまとめられてしまい、これまでその独自な位置についての指摘はされてこなかった。また、筆者が参加したあるブラジル沖縄系移民についての研究会で、奄美移民について報告者へ質問をしたところ、奄美移民と沖縄移民の文化を同一視した返答があった。奄美と沖縄の文化は似通っているが、同じではない。筆者は強い反発を覚えた。なぜなら、筆者は奄美アイデンティティーを持っている一人だからだ。そこで本稿では沖縄と同一視され、鹿児島として一括りにされてきたブラジル奄美移民について報告する。

Ⅰ．ブラジル日本人移民

日本人のブラジル移民は1908年からはじまり、1972年に移民船での移民が廃止になるまで、約25万の人々が新天地であるブラジルを目指した。その多くが西南日本、特に九州や沖縄の人々であった[1]。

奄美大島は鹿児島から南へ約380キロメートルのところに位置し、面積は約712平方キロメートル、人口約6万人の鹿児島県に属する小さな島である。奄美大島の母県である鹿児島県のブラジル移民の歴史は1908年の「笠戸丸」移民から始まる。この笠戸丸に乗船していた781人のうち172人が鹿児島出身の者たちだった。戦前・戦後を合わせて1万6597人が鹿児島からブラジルへと渡った。鹿児島からブラジルに渡った人々は熊本や沖縄などに比べると少ないが、それでも戦前・戦後を合わせてブラジル移民輩出地域としては、上位10位以内に入る移民が盛んな県であった。その鹿児島県内でも特に移民を輩出していたのが川辺郡、姶良郡そして、奄美大島のある大島郡であった。市町村単位で見ると川辺郡の坊津町（現、南さつま市）、それから枕崎市（同）、それから大島郡の宇検村が続く。このように奄美大島は（主に宇検村だが）鹿児島県内ではブラジル移民輩出が盛んな地域であった[2]。

Ⅱ．奄美のブラジル移民村

1．宇検村

では最初のブラジル移民船「笠戸丸」に奄美大島、宇検村出身者は乗船していたのだろうか。

残念なことに笠戸丸には奄美出身者は一人もいなかった。奄美大島からブラジルを目指すのは笠戸丸移民から10年後のこととなる。

10年後の1918年9月6日、讃岐丸という船が長崎を出港してブラジルへ向かった。この船に69人の奄美出身者が乗船していた。彼らが最初のブラジル奄美移民である。ここからブラジル奄美移民の歴史がはじまった。

先に述べたように奄美大島から最もブラジル移民を輩出したのは宇検村という村だった。奄美全体からは167世帯872人がブラジルへ渡った。この人数には奄美大島だけでなく徳之島、喜界島、与論島も含まれている。

宇検村からは戦前、戦後あわせて85世帯492人がブラジルへと渡っている。宇検村移民数は、奄美からブラジルへ渡った人々の56％と過半数を超えており、宇検村は奄美における「移民村」であったことがわかる。

この人数は、1965年に鹿児島県海外協会が発刊している『海外移住者名簿』に記載されている人数を集計したものだ。筆者はブラジル・サンパウロにて、本名簿を元に2014年から聞き取り調査を行ってきた。その中で本名簿に記載されていない奄美出身の人々がいることがわかった。

現在、筆者はサンパウロ移民史料館所蔵の移民名簿やブラジル・サントス港入管記録などを用いて、より正確な移民名簿を作成している。完成後は（若干だが）移民総数が増えることが予想される[3]。

2．宇検村所蔵ブラジル移民資料

(1) ブラジル移住者壮行記念

宇検村教育委員会にはいくつかのブラジル移民に関する資料が保管されている。まずは大正13年に撮影された「ブラジル移住者壮行記念」の写真である。筆者が2014年8月に宇検村で調査をおこなった時に複写した。

写真①　ブラジル移住者壮行記念写真

奄美大島のブラジル移民研究は現在まであまり行われていない。わずかにあるものとして、社会学や人文地理学の領域で先行研究があるが、いずれも奄美大島の資料を用いたものでブラジル側での調査はほとんど行われていない。先行研究が用いている奄美大島の資料というのも、あまり多くは残されておらず、戦前期のものは本写真や、移民送出に係る書簡（例えば渡航許可証など）がいくつか残されているほかは、奄美で発行された雑誌や新聞資料くらいとなっている[4]。

(2) ぶらじる橋

宇検村役場そばに湯湾川という川がある。そこに幅約3mほどの小さなコンクリート製の橋が架かっており、名を「伯国橋(ぶらじる橋)」という。戦時中、空襲で村の3分の2を焼失し焦土と化したふるさとを救いたいと、当時ブラジル在住の宇検村出身者達が義援金を集めて宇検村へと送った。その送られた義援金は当時の金額で25万円以上もあったという。義援金は空襲で分断されてしまった集落を結ぶ橋の建設費に使われることになった。こうして1956年12月この「伯国橋」が完成する。この「伯国橋」という名前は当時の宇検村集落の村人の総意で付けられたという。この「伯国橋」は本当に小さく目立たない橋だが、奄美大島とブラジルを結ぶ貴重な歴史建造物の一つであるといえよう。

写真②　伯国橋（ぶらじる橋）

(3) 一時帰国者からのブラジル土産

宇検村教育委員会には、戦前の移民が数十年ぶりに村へ一時帰国した際に、ブラジルから持ち帰った様々な土産品が保管されている。これだけ見ていると奄美における移民村であった宇検村には多くのブラジル移民に関する資料が残されているのではと期待してしまう。しかし、先述したように資料として残されているのは今挙げたほか、確認できなかった。現在では村内でもブラジルとの交流は家族ごととなってしまい、ブラジル移民のことを知る人も少なくなってきているという。早急に各家庭に眠っているであろうブラジル移民資料を村主導で収集・保管しなければ、村や奄美におけるブラジル移民の歴史が埋もれていってしまう状況となっている。

写真③　ブラジル土産

写真④　ブラジル土産

Ⅲ．はじめてのブラジル調査

1.「奄美」という言葉の持つ力

これまで述べたように資料自体が少ない状況の中、奄美の人々を探して筆者はブラジルへと向かった。

2014年4月、博士課程に入学してすぐブラジル移民研究へと研究テーマを変更して、慌ててブラジル移民について調べ、ほとんど準備もできないままブラジル調査が決まってしまった。あてもないままサンパウロに到着した筆者に、日系社会の人々は口を揃えて言った。「奄美の人、

いるの？」と。鹿児島県人会を訪ねても、同じことを言われた。しかし宿泊先に到着してすぐに、宿主が「たしか、あの人、奄美だったはず」と、奄美出身者の一人に連絡を取ってくれた。翌日、その方がわざわざ筆者の宿泊先に尋ねて来てくれた。聞き取り調査のお願いをすると、「奄美のことを聞きたいってブラジルまで来てくれた人はいなかったよ。本当に嬉しい。明日、うちにおいで」と自宅へ招待してくれた。翌日、その方の自宅へ到着すると、すでにたくさんの奄美出身者が集まっていてくれた。

日系社会では「いるの？」と聞かれた奄美出身者。最初に出会った方がサンパウロ中の奄美出身者に連絡をしてくれ、筆者に「奄美」の話をしてあげようと多くの人たちが呼びかけに応じ集まってくれたのだ。「奄美」という言葉に不思議な力を感じて仕方がなかった。

2. シマ差別

ここでなぜ奄美の人々が日系社会では「いるの？」と言われる存在なのかについて、少し述べておきたい。

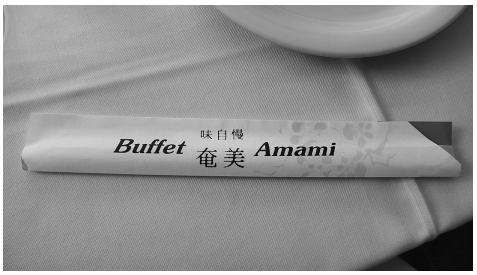
奄美は、長い間「差別」の歴史を歩んで来た。それは今現在の沖縄の基地建設関連のニュースで取り上げられる「土人」という表現に見られるような差別だ[5]。「シマの人間」ということで日本本土の人々から同じ人間として扱われない歴史があった。個人的には今もあると思っている[6]。

少し話はそれるが、昨年神戸の奄美会で、ある地域の婦人部長を務めたという奄美出身の方と出会った。その方は婦人部長に就任する時のことを話してくれた。彼女が部長就任の挨拶をする際「今度の部長には、どこのもんかもわからん得体のしれんところのもんが部長になりました」と紹介され、非常に悔しい思いをしたという内容だった。奄美出身者は、ときにこのような日本本土の人々とは違う存在として扱われることがある。ブラジルに渡った奄美出身者への聞き取り調査でも同じような話を聞くことがあった。神戸の奄美出身者は「シマのもん」と差別されるからできるだけ奄美出身とわからないように暮らしていたという。ブラジルの奄美出身者たちもそうであったのか。だから日系社会で「いるの？」と言われるような存在だったのか。

Ⅳ. ブラジルの「島っちゅ」たち[7]

あふれる郷土愛

(1) ブッフェ奄美



写真⑤　ブッフェ奄美

「ブッフェ奄美」とは、1959年にブラジルへ単身で渡った奄美大島笠利村（現、奄美市笠利）出身者が経営する仕出し屋の屋号である。経営者のヒゴ氏（仮名）はもともと農業移民として、ブラジルへ移住した。ブラジル到着してすぐ高知移民の養鶏場にて農業に従事した。契約期間が過ぎ、独立。それと同時に結婚し、20年前まで妻や子どもたちと一緒に野菜作りをしていた。同じ奄美出身の友人に頼まれて、彼の息子の結婚式

で料理を出したのがきっかけで、それ以来仕出し屋の真似事をするようになった。20年ほど前から仕出し屋として「ブッフェ奄美」を経営。本業の野菜栽培のかたわら、週末はブッフェ奄美として県人会など日系人の集まりに料理を出している。現在では、ほとんどの県人会の集まりは彼のブッフェ奄美に依頼が来るほど、日系社会でも大手の仕出し屋となっている。日系社会では彼のことを親しみを込めて「奄美さん」と呼ぶ人々もいる。しかし奄美出身者だからということではなく、ブッフェ奄美の奄美さんと認識されているに過ぎない。筆者がサンパウロ日系社会で奄美出身者を探していると言っても、奄美出身者としてブッフェ奄美を思い出す人はいなかった。

(2) AMAMI TAMARI

サンパウロに訪れた人が一度は行くであろう中央市場にある魚屋の看板にも「AMAMI（奄美）」の文字を見ることができる。この魚屋を経営するのは奄美大島宇検村の出身者である。実はこの店、サンパウロ駐在の方々にはよく知られている「日系の魚屋さん」だ。日系の魚屋で品質に信頼がおけることに加えて、日本風に刺身にしてくれる店として駐在の妻たちの間では知られた存在だ。この店に行く時、筆者はサンパウロ駐在の妻たちと一緒に市場に行った。彼女たちはいつもここで魚を購入しているのに、ここが奄美出身者の店だとは気がついていなかった。単なるアマミという店舗名と認識していたからである。

写真⑥　AMAMI TAMARI

この店の主人タマリ氏（仮名）もまた、店の名前に奄美と名付けるほど郷土、奄美への強い思いを持っている。彼らはいずれも奄美大島出身の、いわゆる移民一世である。

(3) 奄美魂

2014年筆者が初めてサンパウロ調査を行なった際、奄美という言葉に多くの奄美出身者が呼応して集まってくれたと先にも述べた。その席で二世が着てきたTシャツに「奄美」の文字。彼は、戦後ブラジルへ渡った方の息子であり30代のブラジル人奄美二世だ。両親が日本語を話すため、聞いたことはある程度理解できる。しかし日本語の読書きはほとんどできない。このTシャツに書かれた奄美という文字は、彼が知っている数少ない日本語の一つだ。奄美のことを調べに来た人がいるから、とわざわざこれを着て集まりに参加してくれた。筆者が彼に「あなたは何人なの？」と質問したところ、「Eu sou shimatchu, e brasileiro」自分は島っちゅ、そしてブラジル人だと答えてくれた。ブラジル生まれの二世から島っちゅという言葉を聞くとは思っていなかったのでとても驚いた。彼が知っている日本語はごく簡単な挨拶、そして奄美と島っちゅという言葉だった。彼のような二世、三世にたくさん出会っ

写真⑦　奄美魂

た。彼らは日本語はよくわからないが、奄美という言葉自体に自分たちのルーツである奄美のアイデンティティーを感じているのだと気づいた。

(4) 壁にかかる奄美大島

2015年にクリチバという町に住む奄美出身者を訪ねたときのことである。クリチバでいくつも日本食レストランを経営しているタナカ氏（仮名）の事務室には、「奄美大島」の書が掛けられていた。

写真⑧壁にかかる奄美大島

彼は戦後、奄美大島からブラジルへ渡った一世である。彼の兄が農業をすることを目的に単身でブラジルに渡った。彼の兄は独立して事業を起こす際に、兄弟全員をブラジルへ呼び寄せた。一番下の弟であった彼は5歳でブラジルへと渡ることとなった。幼少期にブラジルに来て育ったため、先ほどの二世同様日本語は多少聞き取ることはできるが読み書きは全くと言っていいほどできない。他の兄弟たちが「あいつは漢字が全く読めない」というほど、日本語を知らない。筆者が彼を訪ねた日、どうしても外せない仕事があったため、他の兄弟たちが彼に代わって彼の仕事場を案内してくれた。他の兄弟たちもこの日初めて彼の事務室に入った。そこで見つけたのが、壁に掛けられた奄美大島の書だった。兄弟たちは口を揃えて、「あいつは奄美大島の漢字を読めるのか！」と驚いた。後に彼から聞き取りをしたところ、この前年に彼ははじめて日本に一時帰国し、奄美大島へも足を運んだという。その際にこの書を購入したという。奄美の記憶は5歳までのわずかなものしかなく、自分はブラジル人だという彼も、奄美の言葉にアイデンティティーを感じているのだ。

(5) UNDOKAI

サンパウロの奄美出身者が集まって毎年9月に運動会を開催している。以前、サンパウロには奄美出身者の組織した団体である奄美会が存在した。2002年まで鹿児島県人会の一支部として公式に活動していた。会が所有していた会館を他の日系団体に譲渡したと同時期に会は解散。それ以来、奄美出身者たちによる公式な集まりはない。現在はこのUNDOKAI（運動会）が、非公式なものであるが年に一回、奄美出身者の集まりとして行われる恒例行事となっている。この運動会には、奄美出身者たちの友人や恋人など非日系のブラジル人も参加している。奄美出身者たちは、彼らと自分たちを分けるため「奄美」の文字を入れたTシャツを作り、ユニフォームとしてそれを着用して参加する。この会の主な主催者は戦前に奄美からブラジルへ移民した人々の子、二世たちである（準二世も含む）。運動会競技への主

写真⑨UNDOKAI

な参加者は彼らの子どもたちである三世や、その子どもたちである四世たちである。戦前移民の二世もブラジルで育ったため、日本語の読み書きはできない。しかし、このTシャツの奄美の文字に現れているように彼らもまた、奄美という文字に自身のルーツ、奄美のアイデンティティーを感じる、または持っているというのが、ブラジル奄美移民の二世、三世などに見られる特徴であった。

Ⅴ．奄美アイデンティティー

2014年から現在まで筆者がブラジルでの調査を行って気づいたのは、奄美出身者のアイデンティティーの現れの違いである。ブラジル在住の奄美出身者はブラジル人に対しては、自身のことを日本人という。同じ日本人や日系人に対しては、奄美や島っちゅという区別を持つ。日本人の中でも沖縄系の人々に対しては、奄美。そして、同じ奄美出身者に対しては、それぞれの出身村単位でアイデンティティーを語ることが見られた。これまで調査した全ての島っちゅのアイデンティティーの表象については、今後さらに深い分析を行わなければならない。

アイデンティティー形成の場としての奄美文化の継承について、奄美系の人々は沖縄系や他の県人会と異なり文化継承の場をあまり持っていない。奄美文化を教える人材がいないため、歌や踊りなどの文化継承が行われずにいるのである。これは現在の話で、以前は踊りを教える人や歌や三味線を教える人がいた。しかし教え手から担い手側へ十分に歌や踊りが受け継がれる前に、教え手の高齢化により奄美文化の継承ができなくなってしまった。そのため現在では、歌も踊りも伝える人（教えることができる人）がいなくなっている状態である。歌や踊りなどの文化継承は行われていないが、奄美にルーツを持つ人々は家族間の会話で使われるわずかな島言葉と、「奄美」「島っちゅ」という言葉自体にアイデンティティーを見出しているというのが、現在のブラジル奄美移民社会の状況である。このあたりについても、今後さらなる調査と分析が必要と考える。

Ⅵ．おわりに

最後に、なぜ奄美移民を研究しているかについて少し触れたい。冒頭でも述べたように筆者自身が奄美アイデンティティーを持つものの一人だ。筆者の母は奄美大島の離島である加計呂麻島の出身だ。両親が共働きだった筆者は、夏休みなどの長期休暇には妹と二人で奄美の祖父母の元へ送られ、島で過ごす日々を与えられていた。筆者と妹はそれを「島送り」と呼んで嫌っていたが、今では大自然や古い慣習が残っていた頃の島で過ごす貴重な時間を与えられていたのだと感謝している。島には祖父母はじめ親戚がたくさんおり、島に帰るたびに「あんたたちはシマの子だから、もうヤマト（日本本土）の学校はやめてシマの学校に通うんだよ」と、島の子、奄美の子というアイデンティティーを強制的に植え付けられていた。ルーツは持っているが生まれ育ったのは島ではないので、筆者たちは当然に反発していた。島で過ごす時間も多かったので年中日焼けをしており、関東地方の学校では「ちびくろサンボ」とからかわれることも多かった。そんなこともあり、奄美にルーツを持つことを押し隠して過ごしてきた。

しかし大学院進学とともにブラジルとのご縁をいただき、ブラジル移民研究を始めるにあたっ

て奄美移民を扱おうと考えた。ブラジルに渡った奄美にルーツを持つ人々がどのようなアイデンティティーを持っているのか、それをどのように保持し継承しているのか、筆者にはとても興味があった。奄美移民の問題は、筆者自身の問題でもあったからである。

2014年から始めた本研究では、現在までに約50名以上もの人々にライフヒストリーを聞くことができた。その膨大なデータを基に奄美移民とは誰だったのか、奄美にとってブラジル移民とは何であったのかを明らかにしていくことを目的としている。

ブラジルで奄美の人々にお話を伺っているといつも「奄美のことを日本でもっと伝えてね」と言われる。これは奄美からブラジルに行った自分たちのことだけではなく、奄美自体のことを日本の中でもっと知ってもらえるようにしてくれということである。奄美から遠く離れたブラジルで長い月日を過ごしていても、奄美を思い続けている奄美の人たちの気持ちに、筆者は少しでも応えたいと思う。その発表の機会を与えてくれた立教大学ラテンアメリカ研究所ラテンアメリカ講座の皆さまには心より感謝申し上げる。

筆者はこれまで奄美にルーツを持つことを「負」と捉えて反発をしてきたが、年齢を重ねるにつれ奄美に対する気持ちが高まってきていた。そのような時に奄美に関する研究をする機会を得ることができたことは本当に幸せなことだと思っている。この奄美のルーツを授けてくれた母に何よりも感謝の気持ちを伝えたい。

ありがたさまりょーた。奄美の言葉でありがとうございます。とーとがなし。

〈註〉

1　ブラジル日本移民については丸山浩明編、2010、『ブラジル日本移民――百年の軌跡』、明石書店などに詳しく書かれているためそちらを参照されたい。

2　奄美のブラジル移民については田島康弘、1997、「奄美とブラジル移民」、鹿児島大学教育学部研究紀要人文・社会学編や宮内久光、2017、「近代期における奄美大島宇検村からの移民について」、琉球大学法学部人間科学科紀要などが挙げられるが、いずれも奄美側からの研究でありブラジル側からの研究は現在のところ本研究のみである。

3　鹿児島県海外移住協会『海外移住者名簿』では、奄美出身者ではない者（原籍が奄美以外）も「構成家族」として含まれているため、彼らを除いた数と名簿に記載されていない奄美出身者の数のどちらが多いかは現在のところ確認できていない。

4　宇検村は2017年村政100周年を迎え新たに村史を編纂した（2017年11月現在まだ刊行されていない）。この中で宇検村ブラジル移民を取り扱ったということなので期待したい。

5　2016年10月18日沖縄県東村高江周辺の米軍北部訓練場内のヘリパッド建設に対し抗議活動をしていた芥川賞作家の目取真俊氏に対し、大阪府警の機動隊員が「触るな。土人（どじん）」と発言し、問題となった。沖縄出身の目取真氏は「最初はすぐには理解できなかった（略）沖縄に対する差別の中で南の島の遅れた地域という意味で使われていた」という。これ以降、本土側の沖縄蔑視、差別はこれまでもたびたび繰り返されてきたとして、1903年に大阪で開催された博覧会で沖縄女性二人を「展示」した「人類館事件」などもメディア等で紹介され、沖縄差別を巡る議論が活発化した。

6　南海日日新聞社、2001、『それぞれの奄美論・50――奄美21世紀への序奏』、南方新社などでも奄美の差別の歴史とそれに対して今後どのように奄美史を考えていくかについて議論があるので参照されたい。

7「島っちゅ」という表記は筆者がこれまで使用してきたものだが現在奄美では「シマッチュ」と表記することが一般的になっており、本発表時点では「島っちゅ」表記を使用したが、今後は現地の人々が親しんでいる「シマッチュ」表記を用いていきたいと考えている。

（かとう　さおり　本講座受講生）